第16回日本医療マネジメント学会学術総会 ランチョンセミナー16

患者志向の感染症診療・対策マネジメント

座長

尾内 一信 先生

川崎医科大学 小児科学 主任教授

演者

青木 洋介 先生

国立大学法人佐賀大学医学部
国際医療学講座臨床感染症学分野 教授
附属病院 感染制御部長

日時

2014年6月14日(土)
11:50~12:50

場所

E会場 岡山コンベンションセンター
3階 302会議室

共催

第16回日本医療マネジメント学会学術総会
塩野義製薬株式会社

患者志向の
感染症診療・対策のマネジメント

青木 洋介

国立大学法人佐賀大学医学部
国際医療学講座臨床感染症学分野 教授
附属病院 感染制御部長

医療現場と行政の双方の取組により感染対策の基盤が整備され，今日，感染対策加算の設置，あるいは関連領域の学術集会や知的ネットワークおよび各専門職認定制度の発展など，一層の基盤整備が進んでいる。これらの施策が医療関連感染の低減に資することは疑いがないが、あくまでもより良い感染症医療を行うための手段であり，目標ではない。換言すれば，感染低減を実現するための“期待値”が整備されたに過ぎず，医療関連感染症に携わる部門は自らの活動の“結果（最上で成果）”について患者視点に立った評価を行うことが求められる。

また，組織が明確に一つに集約した目標を掲げていても，その目標実現に責任を負う組織内マネジメント機能が存在する限り，単一の目標に向かう組織でもマネジメント「する側」と「される側」に二分される。目標は同じでも，その道程には異なる価値規範が点在する事になる。医療機関のような知的労働を主体とする多くの専門家集団により成り立つ組織ほど，複数の価値規範が独立し易い傾向がある。

マネジメント機能あるいは成否に影響を及ぼす複数の因子が存在する。

■ 執行（Administration）と管理（Management）

一定の受動的データ集計の静的繰返し又は受け渡し（administration）と，常に成果に照準を合わせた微調整（management）の異同を知っておく方が良い。

■ 主治医（Player）と感染対策部門（Manager）

主治医は目前の患者が唯一の関心事であり，検査や治療についてdecision makingを行う。感染対策部門は病院全体の疫学保全を主とし，主治医が選択した抗菌薬治療にdecision takingにより介入する。

■ 感染対策（ID Control and prevention）と感染症診療（ID Practice）

感染対策は医療環境で分離される耐性菌をアプローチの主対象とする。感染症診療のアプローチ対象は感染症を発症した患者であり，原因菌の抗菌薬感受性は問わない。現在の我が国では，感染対策の整備に比較し感染症の専門的診療の配備が遅れていると言っても過言ではない。